

国立国語研究所学術情報リポジトリ

首都圏方言の形成と共通語化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, マリ子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002720

首都圏方言の形成と共通語化

久野 マリ子
(國學院大學)

1. 首都圏方言について

首都圏方言をどのようなものと考えるか整理してみよう。ここでの提案は、首都圏方言を東京方言が共通語化した方言ととらえてみたいということである。

首都圏方言に対する考え方にはまだ定まっていない。さまざまな概念が整理されないまま、便利な名称として「首都圏方言」とよんでいるようである。また、使用する研究者の言語的背景によってこの名称の用法が異なるようである。伝統的東京方言の話し手や東京出身の研究者のいう首都圏方言と、東京周辺が生育地である研究者の考える首都圏方言、あるいはもっと広く関東地方が生育地である研究者が考える首都圏方言は、それぞれその意味内容が異なっていると思われる。本稿でいう首都圏方言は、母方言を持ちながら生活の場が東京であるため、日常の言語生活では学校教育で学習した共通語を使用している話し手が考える「首都圏方言」である。首都圏で話される「首都圏方言」は、学習した共通語を使っている話し手から見ると、学校教育で学んだり、書籍で学習したりして習得した共通語とは、かなり様相が異なる点が目立つ。

東京方言は成立から見ると江戸時代後半から日本の政治経済、文化の中心として日本語の中心的役割を担うことばとして発展してきた。そして、今では現代日本語の話すことばのスタンダードとして国語教育や、日本語教育の場で教えられている。教育現場や一般的のとらえ方としては、共通語といつても標準語といつても東京語といつても、ほぼ同じような内容で使われているようになっている。

従来、方言研究では使われる地域と使用する人が安定している方言を研究対象としてきた。特に野外調査をもとに行う方言研究では、典型的な～方言が行われる地域があり、典型的な～方言の話し手がいる。ところが、共通語は何処でも誰でも通じる言葉であるから、もともと決まって話される地域がなく話し手もない。

一方、伝統的方言研究から見ると、共通語の基盤となった東京方言は、話される地域がはっきりしていて、典型的な東京方言の話し手がいることになる。しかし、話し手、地域という観点からみると、現在の東京方言が話されている地域は近隣方言との境界が曖昧で、話し手の数も生え抜きの話者が少ない。平成25年の東京都の人口は約1327万人である。このうち伝統的東京方言の話し手は少ない上、個人差や属性差が大きく人の移動も多い。東京のどこの誰を調べたら東京方言の代表といえるのかも判然としていない。東京方言のように使用する地域も使用する人も多様で安定していない方言の研究は従来の方言研究の手法では捉えきれない。

このような東京を中心とする首都圏に行われている方言を「首都圏方言」と考える。首都圏方言は、今では東京を中心とした首都圏に行われる主流の方言で、話し手の数が多く話さ

れる地域も交通の発達につれて広がり続けていることから、地域も典型的な話し手も特定しにくい。

このような事象は、東京で起きている現象が最も顕著に現れている例であるが、地方の大都市でも多かれ少なかれこのような現象が起こっていると考えられる。つまり、伝統的な方言だけでなく、それに共通語化してわかりやすくなった言語現象が混在して、伝統方言でもなく、単なる共通語でもないことばが行われているのである。このような生え抜きの話者が少ないため伝統方言の影響力が弱くて継承されにくいという言語現象は日本の中だけでなく、世界中の大都市で同じような現象が起こっていると考えられる。

首都圏方言調査の重要な点は、このような話し手も話される地域も方言の実態も曖昧なまま、共通語とか標準語とかスタンダード日本語とか思われるようになり、その話し手が増え続け、その人達が現代日本語の担い手として主流になっていることである。一方、その陰で伝統的東京方言や東京周辺の方言は「東京と同じ」と見なされて詳しい調査も十分ではないまま消滅しようとしている。首都圏方言の調査では、詳細な生え抜きの話者の多人数調査が必要である。

首都圏方言調査の緊急性と必要性がここにある。

2. 首都圏方言の特徴

首都圏方言の特徴は次のような点が指摘できる。

(1) 日本語の話すことばの標準語、共通語として使われている。

首都圏方言は、まだ明確な定義はなく、その話し手に共通している意識は無邪気に「自分は標準語を話している」と思っていることで、その実態の解明はまだ十分とは言えない。

東京やその周辺の人々は、自分の話していることばが文化の中心地である「首都」のことばであるという自負があるため、各自の母方言の干渉やバリエーションを許容しつつ、共通語とか標準語とかという意識をもっている。これが首都圏で行われている方言の実態であろう。

首都圏方言は、共通語にきわめて近いものから山の手ことばや下町ことばにきわめて近いもの、関東地方の伝統的方言の特徴を色濃く持つものまで、幅広いバリエーションを含むと考えられる。日本語には標準語ではなく共通語があるだけであるというのが通説であるが、一般的には共通語よりも標準語という語の方が広く知られて使われている。今や標準語といつても共通語と言ってもその差は明確ではなくなってきている。

「東京のことば」は共通語の基盤であり、誰にでも通じる共通のことばとして日本中にはほぼ通じるので標準語と言ってもよい。理想的な日本語を追求してのことばを標準語と呼ぶという理想はあるが、この議論は、あくまでも理想であって実現はいつになるのかわからない。東京のことばが「共通語」ではなくて「標準語」であるという風潮は一人歩きをしていて、もはやこれをとどめることは難しい。かつてのように方言コンプレックスの弊害が軽減されたこともその背景にある。

終戦後までに言語形成期を終えた東京市生育の話者なら、自分のことばと標準語、共通語とは違うと自覚している話し手がたくさんいた。しかし、今では、伝統的な東京方言の単語

でも自分が使わなければ方言、自分が使えば共通語と意識している若年層が増えている（田中 2010）。この世代は伝統的な山の手ことばも下町ことばも聞く機会も学習する機会もないままに育ち、移住者2世の世代であれば、親の世代が学習して覚えた「共通語」を母方言として育った世代である。

そしてこの世代が今では日本の活躍層として日本語使用の中心となり、スタンダード日本語の使用者となっている。この点が首都圏方言の研究の重要性を強調しなければならない点である。

(2) 首都圏がどこの地域をさすかが明確ではない。

このような世代の人たちが首都圏で話している話しことばを首都圏方言と呼ぶことにしたが、次に首都圏がどこの地域をさすかが問題となる。当然のことながら、行政区域としての東京ではない。東京市が東京23区に広がり、多摩地区を含み、伊豆七島も小笠原も東京都である。このように首都圏方言の話されている地域が、今も広がり続けているという現実がある。NHKの首都圏ニュースでは、一都六県を首都圏と呼んでいる。東京都といつても伊豆七島から小笠原諸島まで含むが、島嶼部の方言は首都圏方言とは言われない。政治的にも地理的にも決められない首都圏は、今や首都圏に通勤通学する人々の意識の上の首都圏といってもよい。首都圏方言の研究には、首都圏としては主に東京、埼玉、千葉、神奈川が中心となる。そのほかに通勤通学に可能な地域で本人が「自分は標準語を話す」と思っている地域も調査対象に含まれるから、東京都の調査だけでは首都圏方言は明らかにできない。

首都圏方言の中に地域差があることは、すでに三井プロジェクトの成果の中で指摘されている。

(3) 江戸語を継承する伝統的方言の話し手の数が少ない。

東京の成立からみれば、伝統的な方言を継承するだけの東京語話者の勢力が十分ではないため圧倒的多数の移住者のことばに影響を与えることができず、伝統的方言が主流方言とはなりきれないという事情がある。しかし、東京やその周辺の人々は、自分の話していることばが文化の中心地である首都東京のことばであるという自負があるため、各自の母方言の干渉やバリエーションを許容しつつ、共通語とか標準語とかという意識をもっている。これが首都圏で行われている方言の実態であろう。

江戸、東京は、江戸時代、明治維新後の東京市を通じて、人口の増減が激しい。明治維新直後、江戸に住んでいた人が一端出身地に帰り全国に散ったため一時的に東京の人口が急激に減ったが、その後、全国各地から東京への人口の流入も始まった。関東大震災、東京大空襲など人口減や流動化もあったが全国からの人の移動は絶えることはなかった。現在も東京に本社のある企業や官庁が地方出身者を新規採用することによって東京出身でない人々が東京に定着する流れは続いている。

現代の首都圏で行われていることばの話し手は、首都圏以外の地方からの移住者が多く、その人達の2世、3世は首都圏方言を話している。例えば高度経済成長の時代に東北や九州

から集団就職した人たちや、全国各地から東京で高等教育を受けてそのまま首都圏に住み着いた人たちが首都圏方言の話し手になっているのである。東京都の近郊に住んでいても東京都内に通勤、通学する人も含まれる。この人達は、伝統的方言が話せず、親世代が学習した共通語を母方言としている。

(4) 移住者1世の共通語を母方言とする2世、3世が話し手の中心である。

首都圏方言の話し手は、東京を中心とする東京都内に通勤通学できる範囲に住む人で、伝統的なその土地の方言を継承していないので伝統的方言を話すことができず、標準語や共通語を母方言として言語生活を送っている人々の方言をさす。主な使用範囲は主に東京、千葉、神奈川、埼玉であるが、それ以外でも東京に通勤通学してその土地の伝統的方言を継承していない人の話すことばも含める。つまり、首都圏に住む人で、本人がその土地の伝統的方言が話せず、自分は、標準語、共通語を話していると思っている人のことばが首都圏方言である。

東京23区以外の地域や都下でも伝統的な山の手ことばや下町ことばを継承していない人々が話す方言もこれに含められる。これらの話し手は、主として親か祖父母の世代に東京やその近郊に住み学習した共通語を使う人々の子供や孫の世代が主である。

移住者1世の世代は出身地の伝統的方言と、学習した共通語を使って生活している。その学習した共通語は、日常の生活は共通語で行うが自分の身についた方言の干渉から逃れることはできないので、伝統的な東京方言よりは規則的で説明的な共通語である。2世、3世は1世の共通語を母方言として育つ。それはすでに共通語と言うよりは生活語であって、彼らは伝統的な東京方言と接する機会は少ない。このような成立過程を経た首都圏方言は共通語と似た特徴を持っているが伝統的東京方言とは異なる。

(5) 多様なバリエーションを許容し、様々なスタイルの話し手が含まれる。

このような成立事情から首都圏方言は様々なバリエーションを許容し、さまざまなスタイルを選択する話し手が存在すると考えられる。地方の小さな言語集団では典型的なその方言の話し手がいて典型的な言語事象があるが、首都圏方言では全員が同じ言語現象を共有しているわけではない。たとえ、ある言語現象が優勢であっても、全員がそのような事象になるわけではなく、異なる事象を保つ人もいる。そのような人の数は首都圏方言全体の中では少數であってもかなりの数になる。個人差とか個例とかとして無視できない数に上ることが予測される。首都圏方言の調査は首都圏に含まれる、東京とその周辺地域での多人数調査が必要である。

3. 首都圏方言と共通語との違い

共通語とは、日本中どこでも通じることばで、理想のことばとしての標準語はまだ存在しないが、現実に行われているものであるとされている。

すでに指摘されているように、共通語は「教養のある山の手ことばを基盤」としているが東

京方言そのものではない。伝統的東京方言の勢力が弱くなった今、伝統的東京方言は共通語化した首都圏方言に取って替わられ、首都圏方言が東京方言の位置につこうとしている。しかし、首都圏方言もまた共通語に似ているところもあるが全く同じというわけではない。首都圏方言と共通語の差について考えてみよう。

(1) 使われる文体が違う。

丁寧な文体や上品、教養のある人の話し方、丁寧な話し方をしなければならないと意識され緊張をもって話される場、あるいは公の場では、首都圏方言と共通語はあまり差がない。またこの場合、地方出身者が学習した共通語ともあまり差がないと考えられる。伝統的東京方言の話し手でも、首都圏以外の地方に住む人でも、このような丁寧な文体では共通語を話そうとするから、共通語と首都圏方言との差は小さい。日本全国の義務教育の場で「国語」の授業で丁寧な文体の話しことばを教科書などで学習する。話しことばを書きことばに文字化したものを作成する日本全国の人が学校教育で学習するので、主として音声を除けば、この文体は日本全国共通である。

ただし、東京以外の地方の話者は、教科書で扱われる場面以外の日常の言語生活で使われることばの全てを共通語で話すことできない。学習した経験がない場面が現れた場合では、地域方言や地域差が現れる。地域方言の話し手は丁寧な場面では共通語を使い、それ以外の日常の言語生活では伝統的方言を使って話す。かりにすでにその伝統的方言がかなり共通語化していたとしても、公の場ではないところで話されるのは共通語ではないし、首都圏方言の話し方とは異なっている。当然、地域方言の中でも日常の言語生活を共通語と共通語に近い表現を好む話者と、共通語と地域方言を使い分ける話者がいる。

(2) どのような場面で共通語が使われるか。

それでは、共通語の使われる場面はどこか。共通語化が進んだ今では、日本全国で地域方言しか話せない人はほとんどいないといってもいい。日本中の人が共通語を話せるが、日本中で日常の言語生活全てが共通語で行われているかというとそうではない。共通語を話す場面と話さなくても言い場面とを使い分けている。

コミックの中での会話で共通語の使われる場面をみてみると、職場や教室での公式な話し方は共通語で行われることが多い。たとえば、『じゅりん子チエ』(はるき悦巳)では、部長と呼ばれる職階の警察官が部下の警察官を前に指示を出す場面や、花井拳骨の出身大学の大学教員には関西弁ではなく共通語を使わせている。また、チエの小学校担任である花井渉は共通語である。また、小学校低学年向けのコミック『キャプテン翼』(高橋陽一) や、大企業が舞台となっているサラリーマンものの『課長島耕作』(弘兼憲史) や、『釣りバカ日誌』(作・やまさき十三、画・北見けんいち)などの会話も共通語である。『海街ダイアリー』(吉田秋生)、『リアル』などでは、会社、病院、大学などの職場での公的な立場の会話や、相手と距離を保ちたい場面では共通語を使わせているし、独白、説明する場合でも共通語が使われている。関西方言が役割語として使われている。

(3) 首都圏方言の使われる場面はどこか。

共通語は誰にでもわかることばで、学校教育で「国語」で学習した話しことばであるが、言語生活全般をまかないきれるほどの用法までは定まっていないため、規範はかなり緩やかである。日常の言語生活は、丁寧な文体だけでは成立しない。その結果として、首都圏に移住した2世3世の話す方言は、伝統的な方言がもつ体系からも学習した共通語からも異なる実態を持つようになってきている。

それでは、首都圏方言の使われる場面はどこか。首都圏方言の特徴は、小学校や中学校、高等学校での生徒間でのあまり丁寧でない内輪の会話にその特徴が目立つことが多いようである。この場合の首都圏方言は学校で学習する「共通語」とは、あきらかに違っている。丁寧な文体の首都圏方言は日本中の学校で教えられる共通語にきわめて近い。小学生や中学生や、高校生が日常生活の友達同士や家族内での気の置けない会話で使われることばは、共通語や標準語とは異なる表現が用いられることが多い。地域方言では丁寧な場面では共通語、それ以外の日常の気の置けない場面では伝統的方言の使いわけがある。首都圏方言でも、日常の気の置けない場面での方言は共通語ではない。例えば、小学生や中学生が学校内で使う丁寧でない文体として「ゼッテー ナカス（ぜったいに泣かせる）」「チゲーヨ（違うよ）」「アメバッカ フル（雨ばかりふる）」「モンクバッカ イッテンジャン（文句ばかり言っているではないの）」「アンタニ マカシタヨ（あなたに任せたよ）」のような表現は、共通語や標準語としては認められないし、共通語化の進んだ地方都市でも使用されない。

(4) 丁寧でない文体にみる首都圏方言。

首都圏方言の若年層の話し手は丁寧な文体と内輪の気の置けない場面での文体の差を意識していない。「ソンナノ ヤダカラ（そのようなことは嫌だから）」「ナンダッテ シッテンダヨ（何でも知っているのだよ）」という表現は首都圏方言であって共通語ではない。このような表現にたいして、地域方言の話し手は「共通語」ではないと思っている。共通語は丁寧な場面で使われることばで乱暴の言い方やくだけた言い方は共通語ではないと意識している。

たとえば、「アメニ フラレチャッタ（雨に降られてしまった）」とか「ズイブン ムカシオト カワッチャッタンダネ（ずいぶん昔とは変わってしまったのだね）」のような「てしまった」を「チャッタ」という表現を、公の場の話しことばとして使う人が増えている。首都圏方言であって共通語ではないことに気づかない首都圏方言話者も多いが、地域方言の話し手にとっては、この表現が公の場で使用されることには抵抗感がある。

このような丁寧でない普段のくだけた会話で使われる首都圏方言には、従来、伝統的な下町ことばとして指摘されている事象や、関東方言に広く報告される事象と類似した点が多く観察される。

参考文献

- 秋永一枝ほか（2007）『東京都のことば』明治書院。
- 井上史雄編（1983）『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』（昭和

56・57年度 文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書).

- 大島一郎・久野マリ子（1991）「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』
(1)（文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書）.
- 大島一郎・久野マリ子（1993）「東京都の言語実態の諸相」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』(3)（文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都(及び放送関係者)における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書）.
- 加藤正信（1977）「共通語」佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）『言語学大辞典 第6巻』三省堂.
- 木川行央・久野マリ子（2012）「神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化」『Scientific approaches to language 11』神田外語大学.
- 国広哲弥・中本正智（1984）『東京語のゆれ調査報告』（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」総括班）.
- 久野マリ子編（2009）『首都圏方言の研究』國學院大學大学院文学研究科.
- 久野マリ子編（2010-2013）『首都圏方言の研究』(1) – (4) 國學院大學大学院文学研究科久野研究室.
- 久野マリ子・木川行央（2012）「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要 18』神田外語大学.
- 國學院大學日本文化研究所編（1995）『東京語のゆくえ』東京堂.
- 真田信治（1987）『標準語の成立事情』P H P研究所.
- 神保格（1950）『標準語研究』日本放送出版協会.
- 田中章夫（1983）『東京語—その成立と展開—』明治書院.
- 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院.
- 土屋信一（2009）『江戸・東京語研究 一共通語への道』勉誠出版.
- 東京都教育委員会編（1986）『東京都言語地図』東京都教育委員会.
- 中村通夫（1948）『東京語の性格』川田書房.
- 飛田良文（1993）『東京語成立史の研究』東京堂出版.
- 松村明（1977）『近代の国語—江戸から近代へ』桜楓社.

付録：「新・東京都言語地図」より

首都圏方言の実態を示す資料として、『新・東京都言語地図』作成のための調査から、地図を何枚か示す。『新・東京都言語地図』作成のための調査の概要は次のとおり。

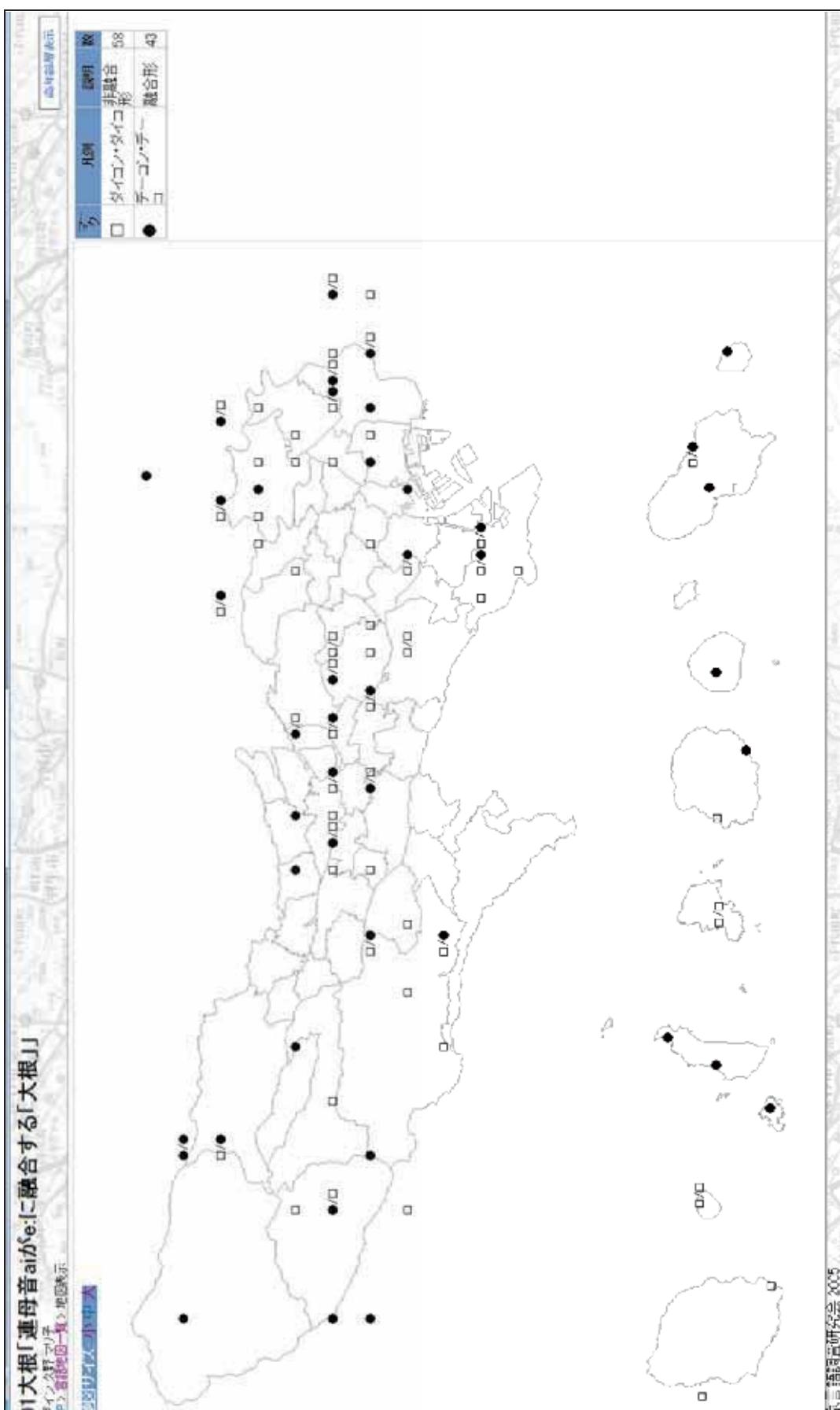
- 実施 東京都立大学大学院大島一郎研究室、國學院大學大学院生・学部学生、神田外国语大学大学院生、
東京言語調査研究会（故大島一郎 東京都立大学名誉教授 主宰）¹会員
- 調査年 1989（平成元）年～1991（平成3）年
- 調査地点 東京都及びその周辺地区を含む地域を、人口の密集度に応じて、約250地点以上、300地点以内を等分に選定した。
- 調査対象 生年 高年層（大正15年以前に出生）
青年層（昭和39年から昭和49年の間に出生）
言語経歴 生え抜き
性別 男性
人数 各地点1名ずつ
- 調査項目 面接質問法によるもの 計283項目
音韻 62 アクセント 98 文法 50 語彙 43 言語意識 30
アンケート記入方法によるもの 計55項目

『新東京都言語地図』は、東京言語調査研究会の会員と國學院大學文学部日本語学専攻の学生が中心となって作成した。以下の地図は、久野（2013）の中から転載した。これらの地図は大島一郎研究会代表から生前に発表の許可を得た地図の一部である。

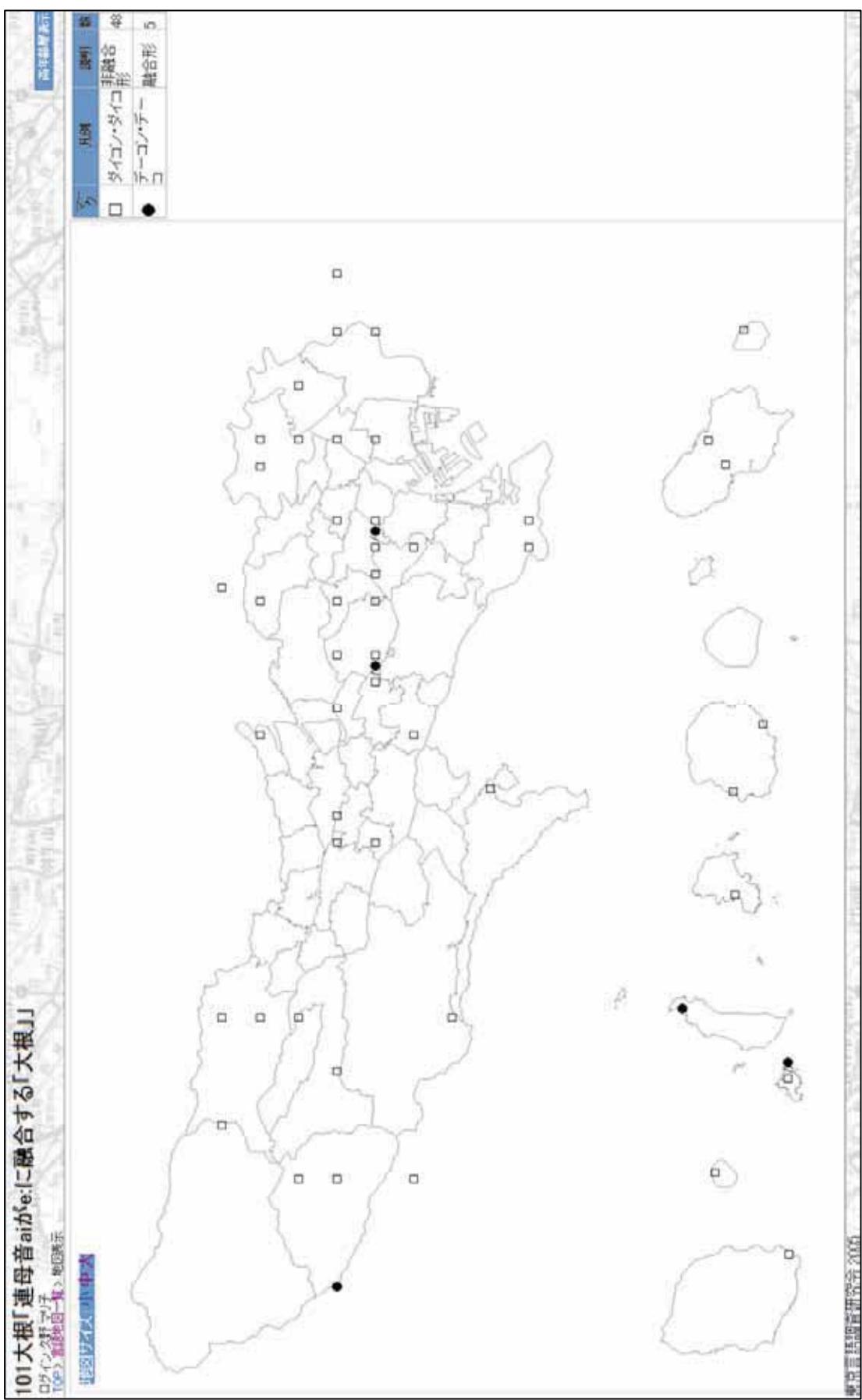
参考文献

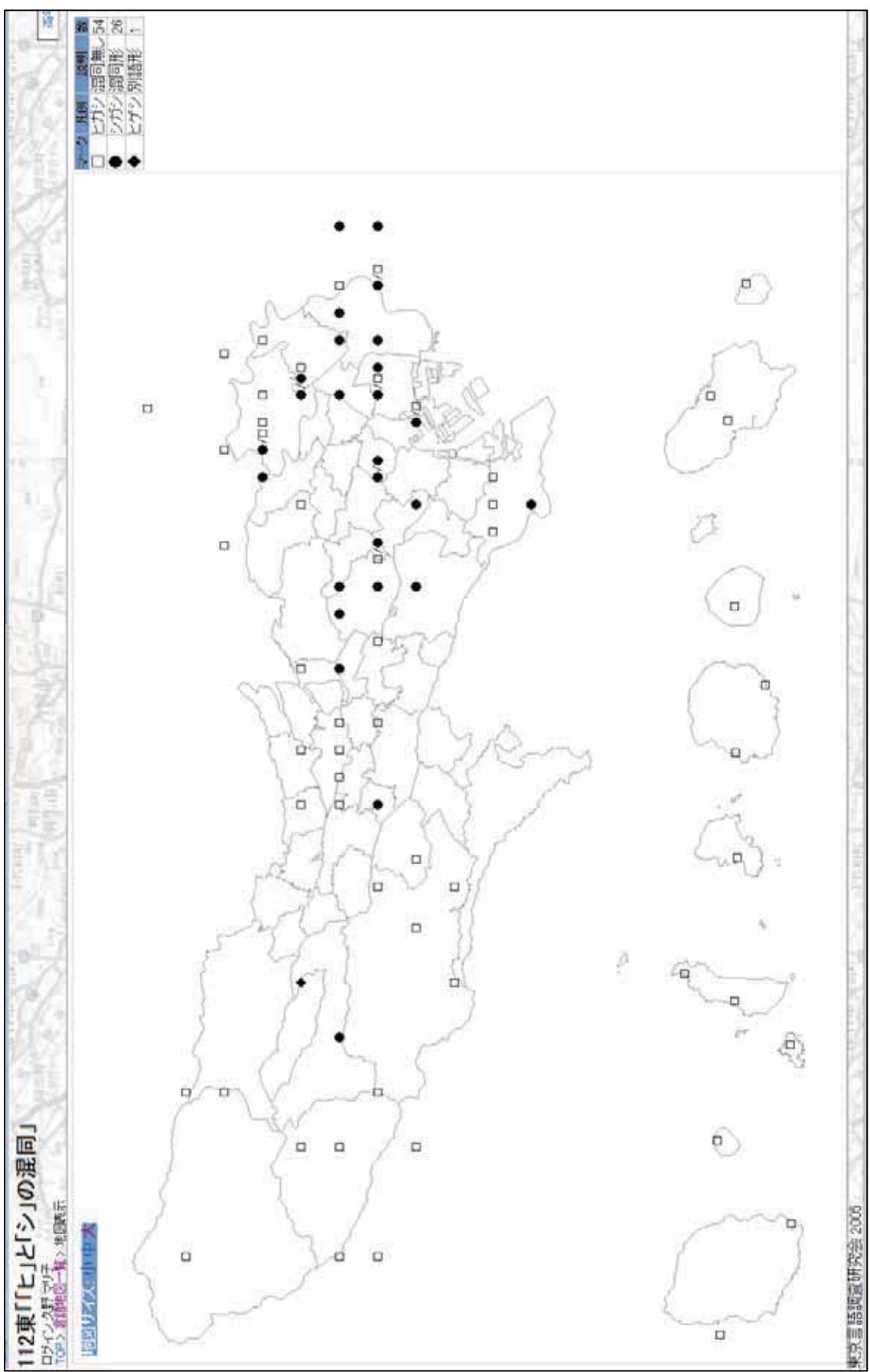
- 大島一郎・久野マリ子（1991）「東京都の言語実態」佐藤亮一編『東京語音声の諸相』（1）（文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴：東京都（及び放送関係者）における音声の収集と研究」研究代表者・杉藤美代子 研究成果刊行書）71-97.
- 久野マリ子（1996）「はじめに」國學院大學日本文化研究所編『東京語のゆくえ』東京堂出版 1-19.
- 久野マリ子（2013）「新東京都言語地図点描—音韻・アクセントといくつかの項目の分布から—」『国語研究』76（國學院大學国語研究会）
- 濱中誠・竹林暁（2007）「言語地図の簡単で新しい作成方法—ウェブアプリケーション bunpu. jphougen. jp —」『日本方言研究会第84回研究発表会発表原稿集』25-32.

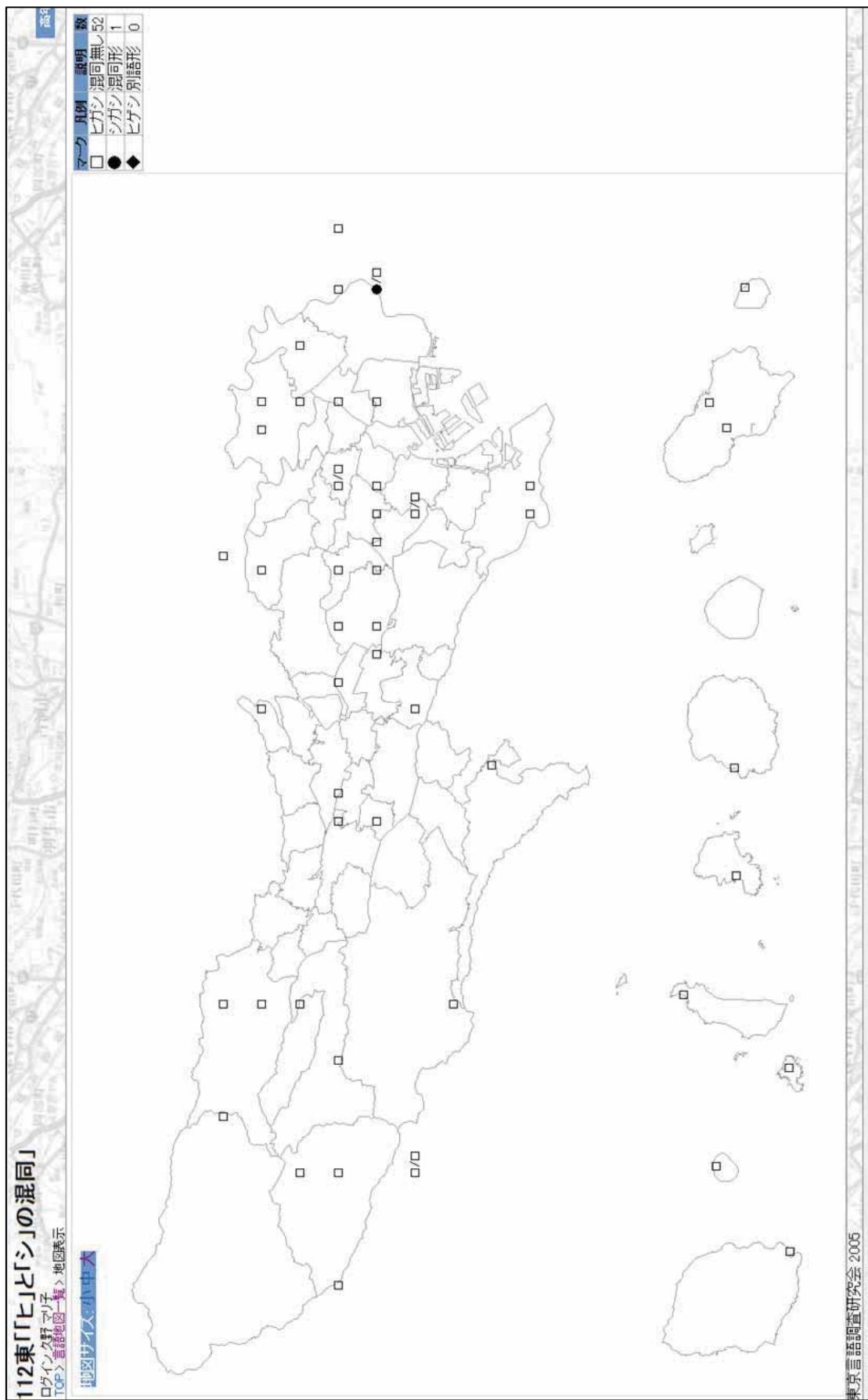
¹ 久野が副代表として所属している。



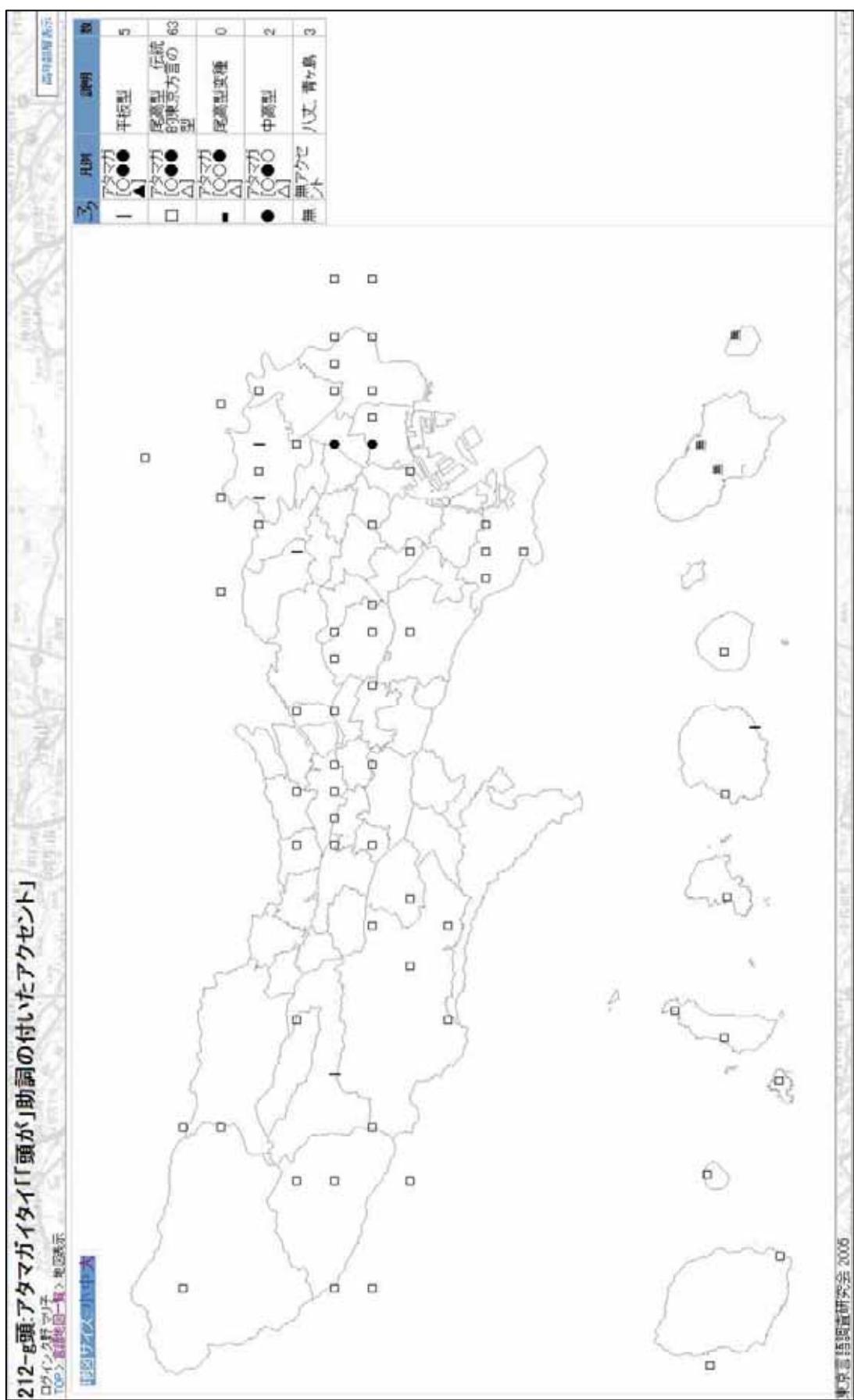
地図 1 連母音アイの融合「大根」(高年層)



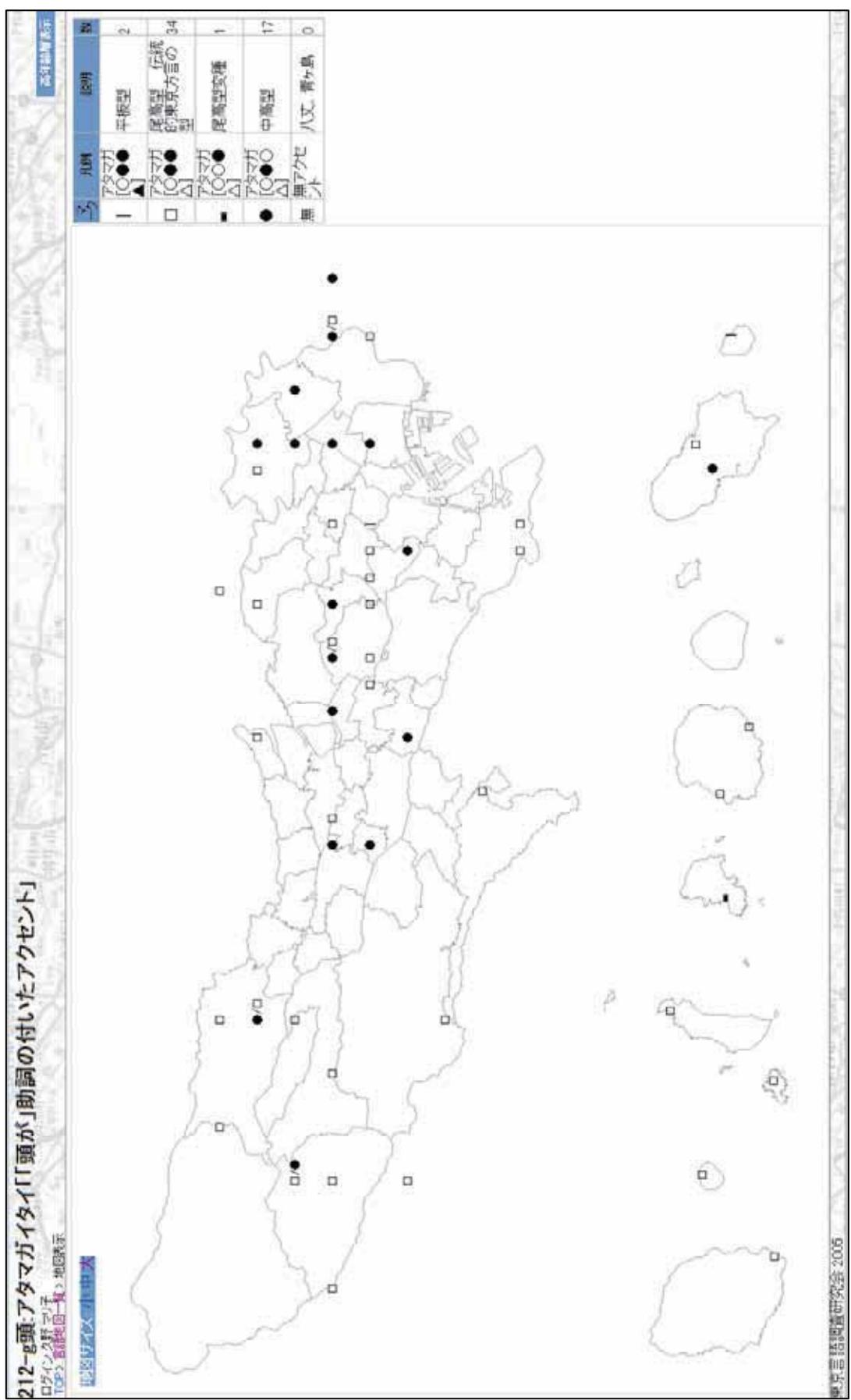




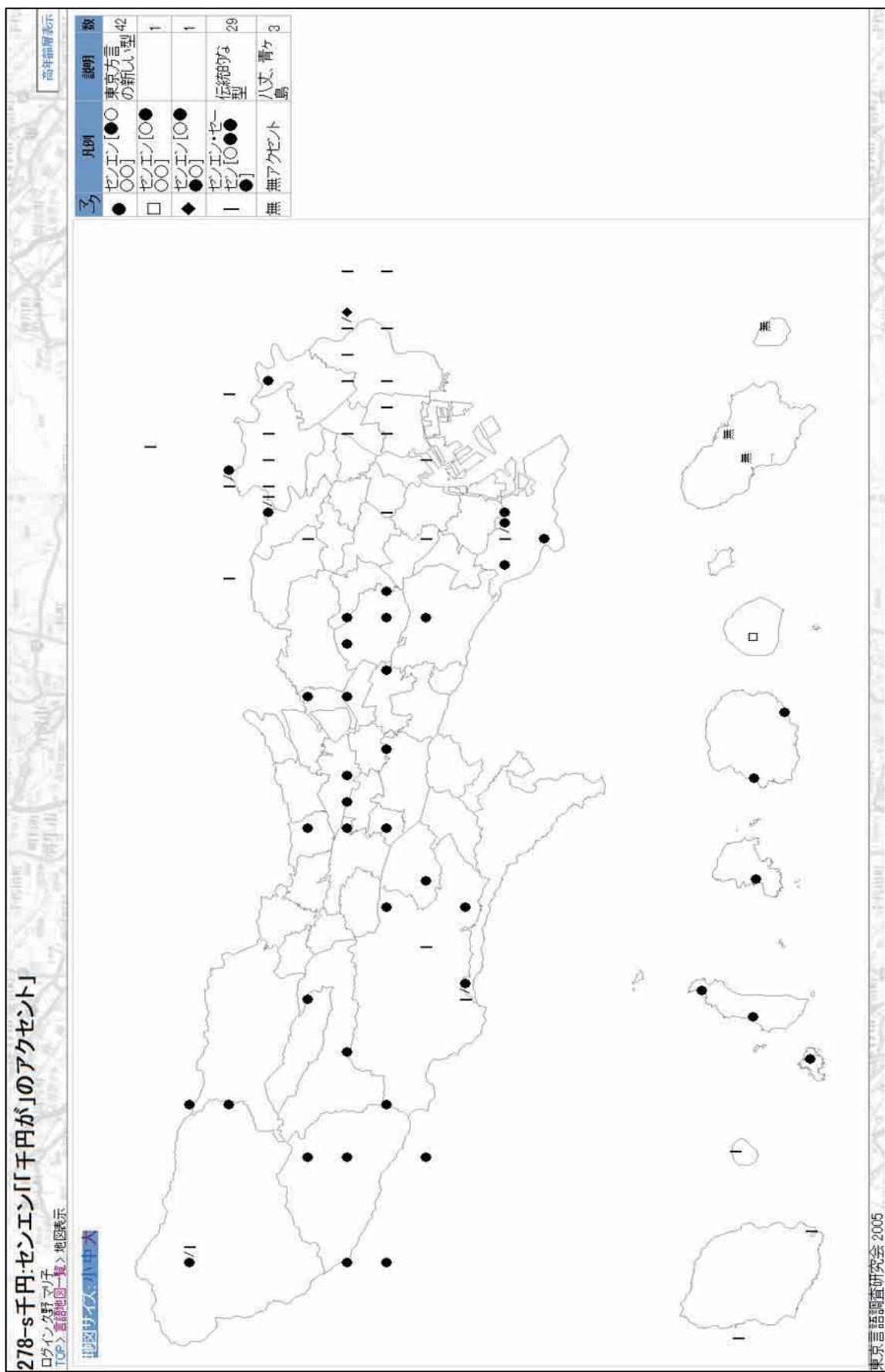
地図4 ヒとシひ混同(若干年齢)



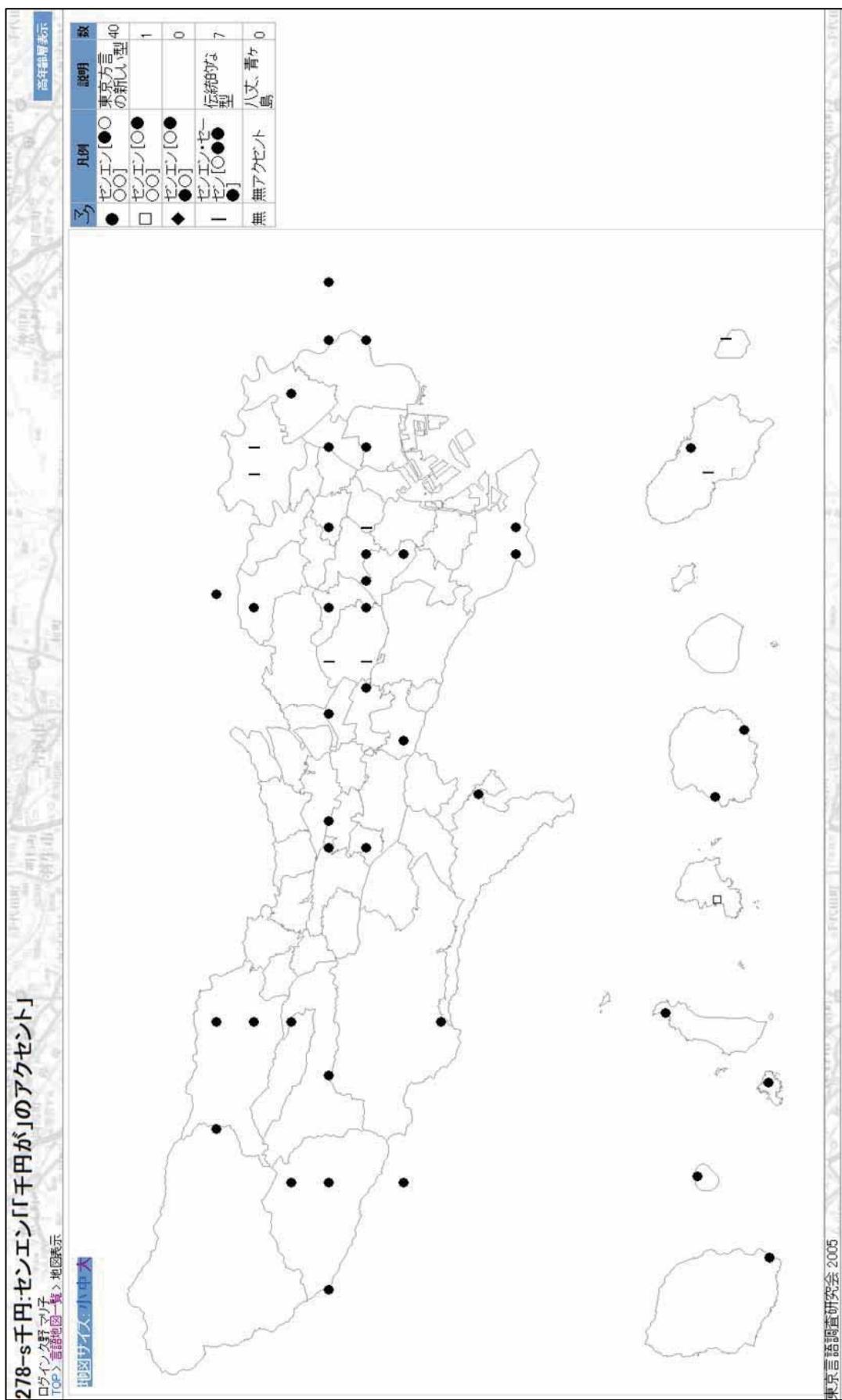
地図5 「頭が」の中高型のアクセント（高年層）



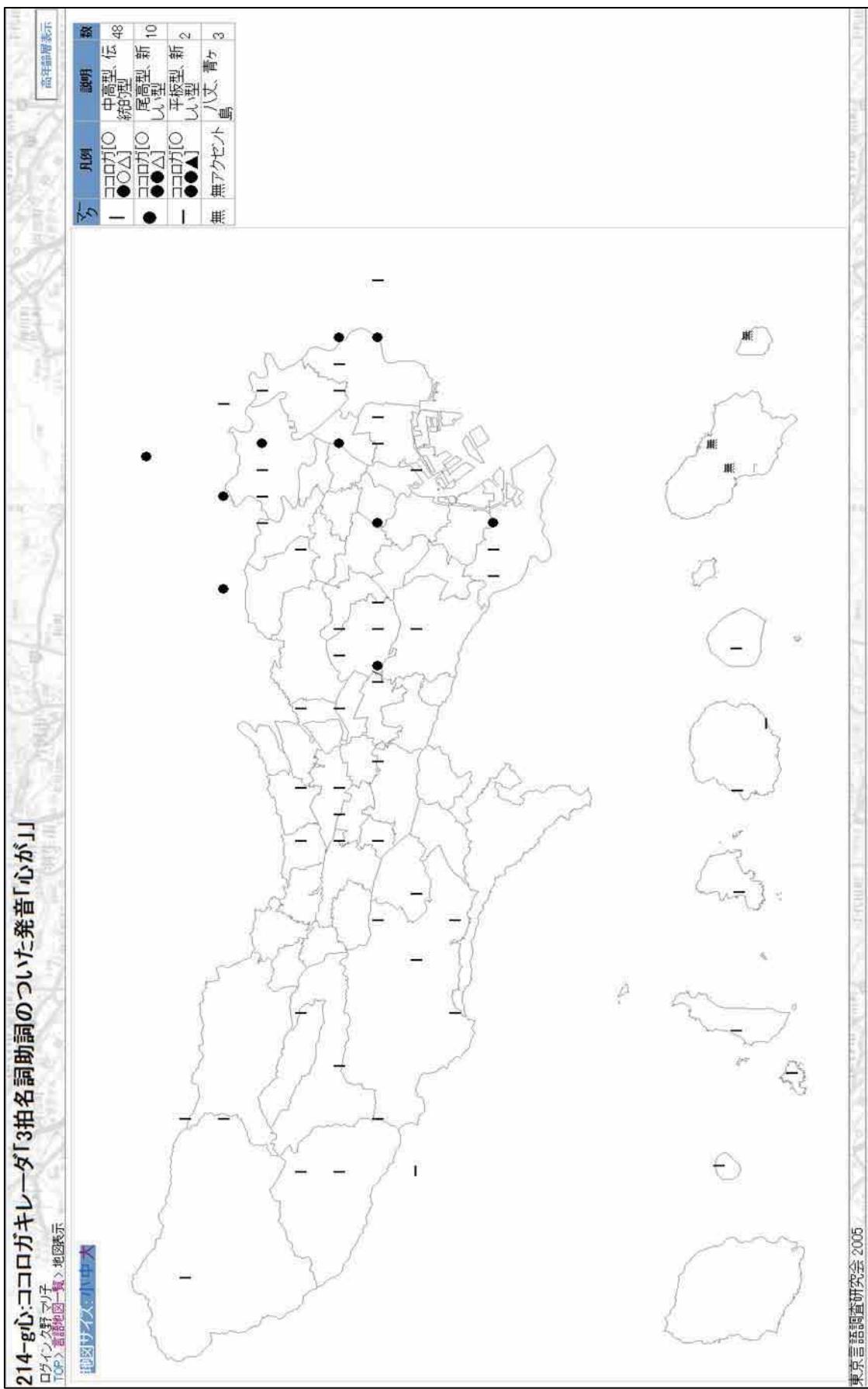
地図 6 「頭が」 中高型のアクセント（若年層）



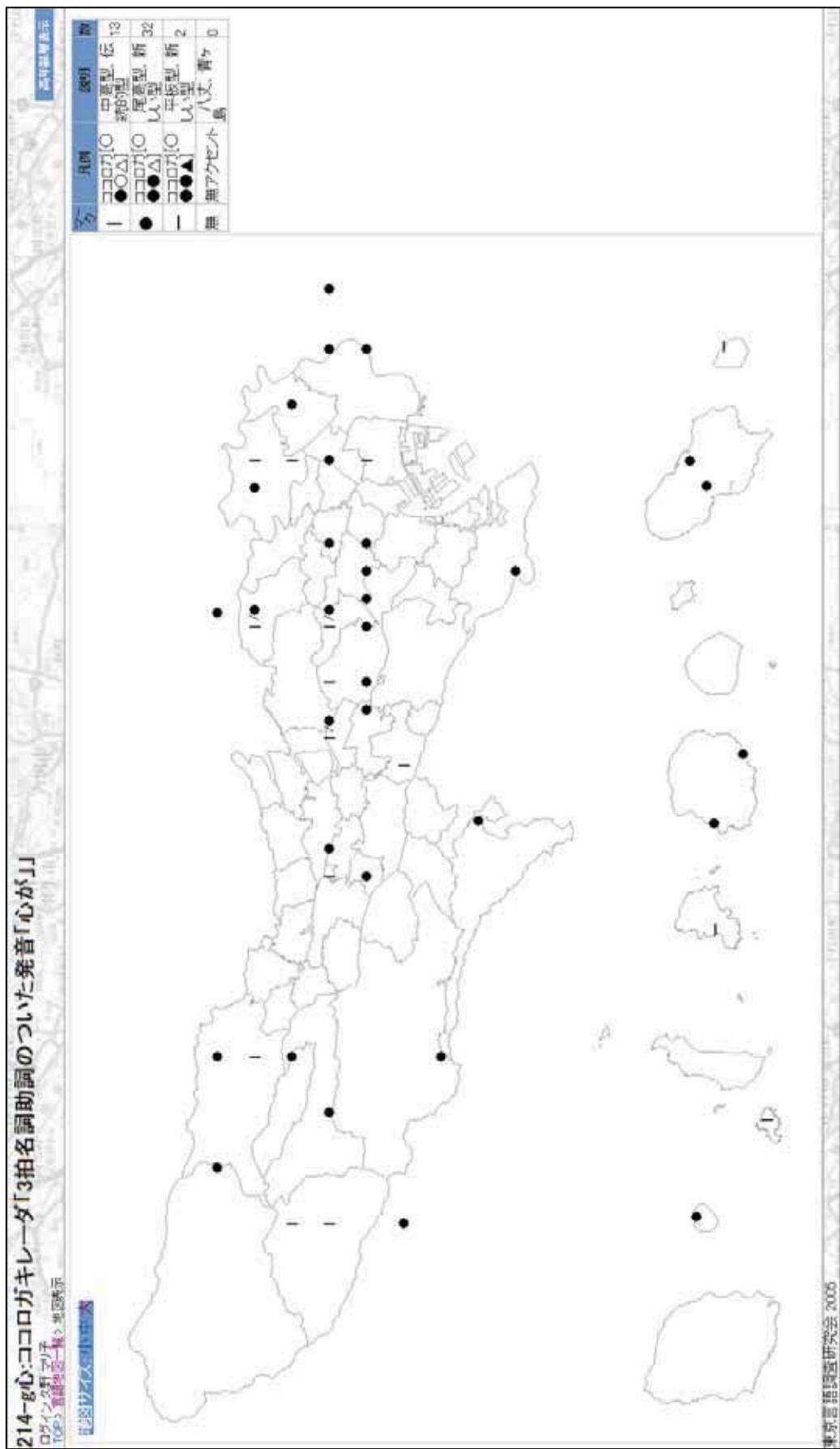
地図7 「千円」頭高型のアクセント（高年層）



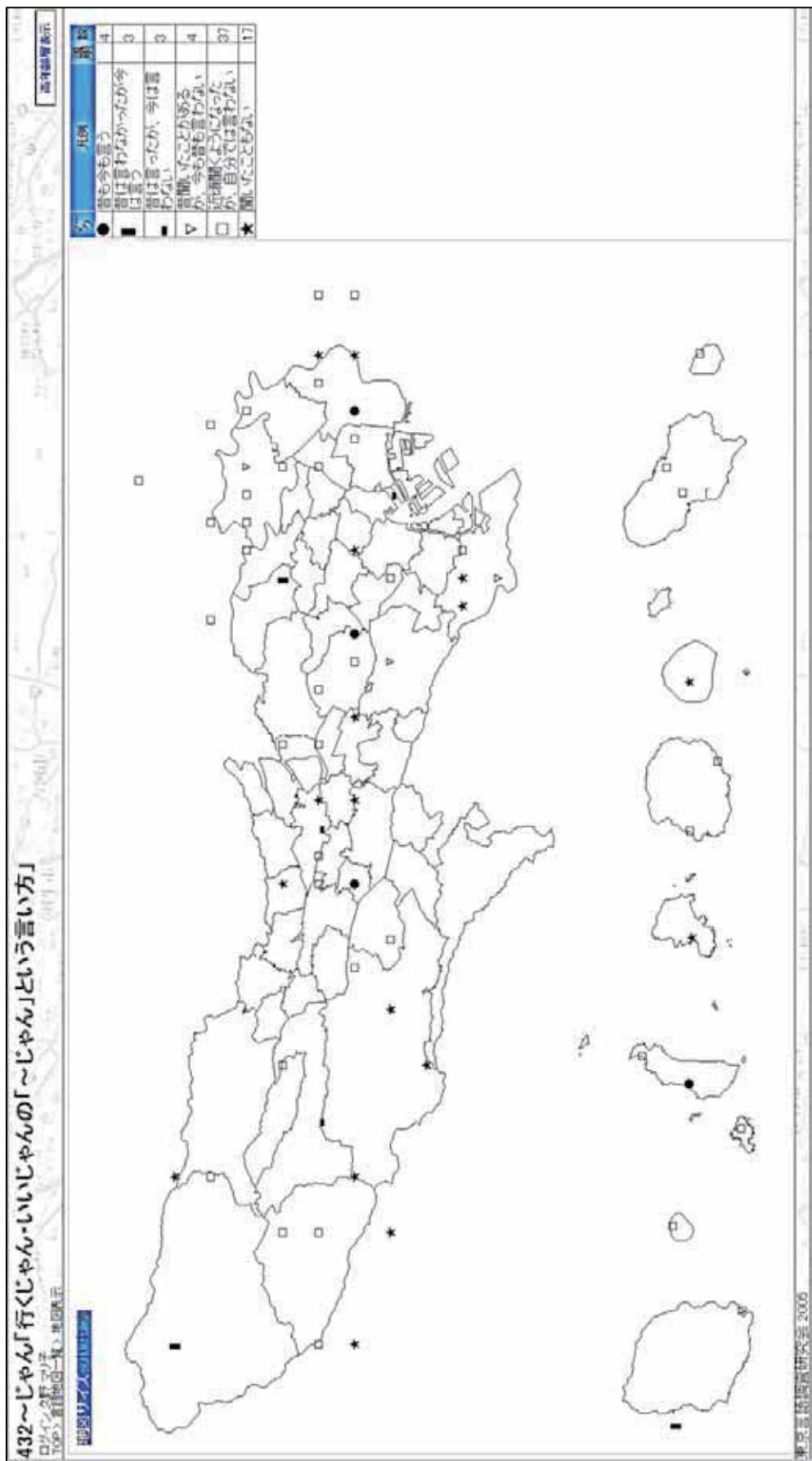
地図8 「千円」頭高型のアクセント（若年層）



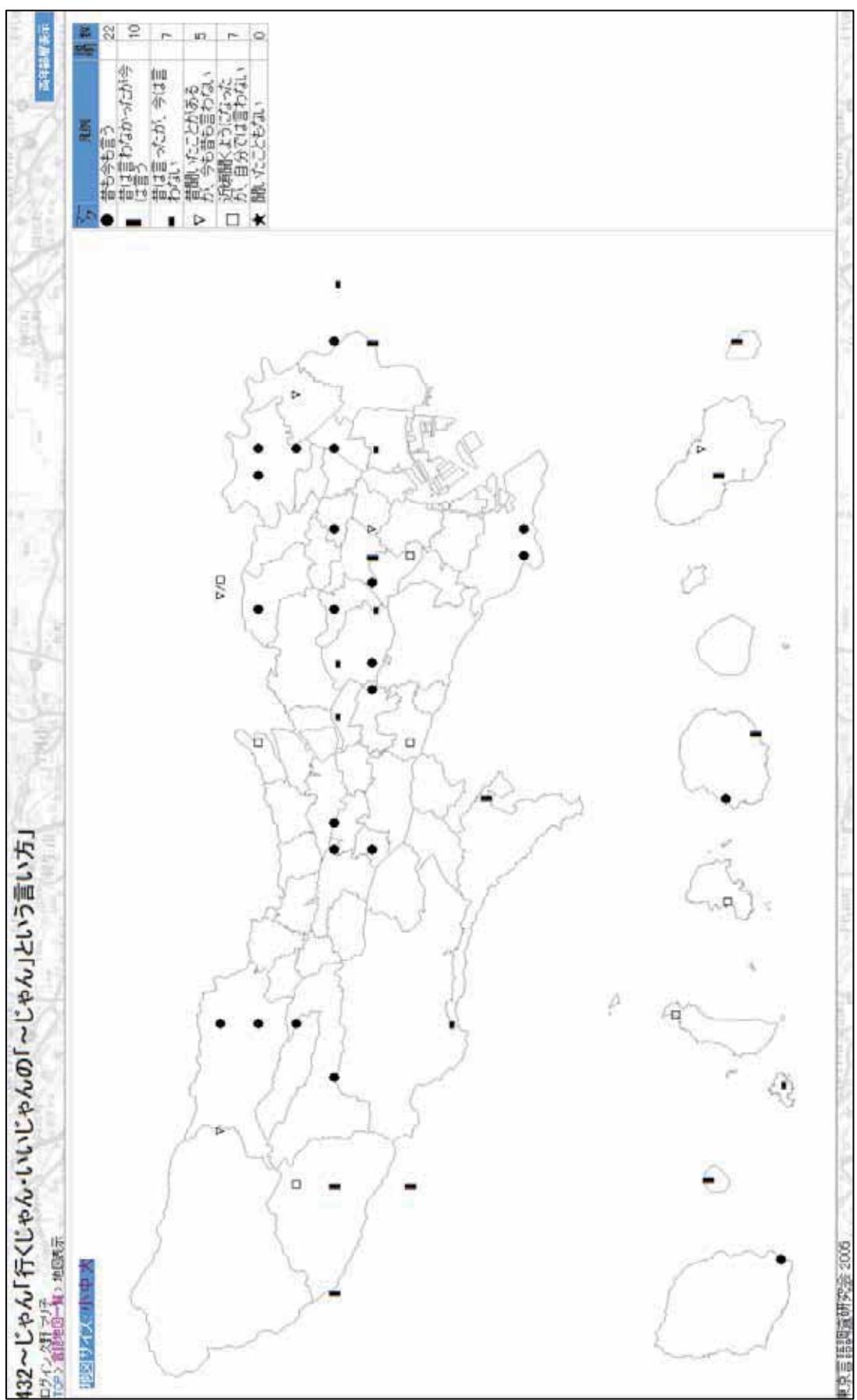
地図9 「心が」 中高型のアクセント（高年層）



地図 10 「心が」中高型のアクセント(若年層)



地図11 ~U~ やん 「行くじやん・いいU~ やん」(高千層)



地図12～じ ゃん「行くじ ゃん・いいじ ゃん」(若年層)